

推論を通して人は言葉の使用を身につけるのである。

ブランドムの議論を踏まえれば、私たちが認識する上で対象を特定するためには、経験の問題ではなく論理的問題として、言葉の体系を必要とする。そうして初めて、対象を理解することができる。これは、対象が素朴に実在しているのではなく、先行する言葉の関係性の中に対象が回収されることを意味している。

この議論は必ずしも、宗教的実在や世界の存在を否定してはいない。しかし、どのような対象も言葉の関係性の中でのみ理解されることが立証されるのであれば、諸宗教の「言語の体系」は実在に先立つ。つまり、言語的宗教構成主義は実在主義に対して、明確に優位性を主張できることになる。

基督教に対する理論上の四つの疑問及び理由と 当該論の若干の適用

工藤 亨

戦後半世紀余り、カトリックの所謂求道者として歩んで来たが、概して下記の事由で、基督教を仏教の根本理法に基づける結果となった。(一)アリストテレスは「生来人は皆第一の原因・原理(以下、P.C.)を知ることを求める」と云い、トマスとホッブスによると「いれ(P.C.)を何人も神と呼ぶ」。処で一般に、言葉(その形・音声および概念)より、言葉が指し示す(denote)事柄の方が先行する。すると自然理性上、基督教の

「神」より、用語「神」が指し示す「第一の原因・原理(P.C.)」が先行するであろう。(二)「エリエリレマサバクタニ」と絶叫し、「魂を御手に委ね奉(つ)」て息絶えたイエス。獄中から「神の前で…神なしに生きる」と認めたボンヘッファー。神は「真理の源」で把握された「真理」ではないと説いて来た公会。いずれも、「今見てい(ない)」がしかし念頭にはある「神」に、誠を尽し「信仰」を捧げた。しかし乍ら実は、各々の念頭に宗教的情意と相關的に「源」としてある当の「神」に更に先行して、P.C./P.C.である究極根原理法(以下、D.p.c.)が先行し、そして万有のP.C.であるその故で、一切事と不可分不可同不可逆であろう。(三)我々が住する理法^{アルマ}一円界には、「一度起ったこと(事象(event))」を起きなかったことになすことは、神の全能をもつてしてもなしえない」という実体である理法(以下、仮称事象の永遠性(imn.))があつて、時空界・永遠界共に妥当する。そしてトマスは、仮に三一の神(以下、D₃)が生まれたみ子・み言(有)を生まれなかったこと(無)になし得れば、有を無となすことになって、神の「合理性」に反するのだ、と云う。しかし乍ら、み子・み言は、D₂の三一の本性の故で同本性によつて生まれ、そして一度生まれると即直ちに理法·imn.の規制の下にあるその故で、父なる神も、生まれなかったことになしえないのであろう。従つて存在論上、「無からの創造」(以下、c(e)n.)では、三一神とその本性への第一の他性として、実体理法·imn.が外在して相対しD₂の奥底に先行し先在する故、文字通りのc.n.は成り立ちえない、と認める。そして理法·imn.とD₂のc.n.の業は、両者の基底

に更に先行し先在する万有の P.C./P.C. である D.p.c. が媒介し所謂神変加持する、と認めるのである。(四)基督教の根本教義「原罪」なるものが実在すると仮定する。すると、当の現実態への可能態(以下、仮称原罪への可能性(P.O.S.))が先在しよう。すると無からの創造の際、D₂の全善神性において終始全知の対象としてある当の P.O.S. は、いずれかのプロセス・仕方において、「父なる神」に「よし」と裁可されて、現実態を附与されよう。そしてその是認裁可のとき、全善の神性意志(g)は是認される非善の P.O.S. (〜g)は、「善」(g)なるものとして神性意志に一致し、是認する全善意志において全善意志としてあり、非善の P.O.S. (〜g)≡全善(g)であろう。しかし乍ら D₂は創造の折、全被造世界を「凡て善し」と是認する故、非善Ⅲ全善となれば、天地の両世界が善Ⅲ非善となり、無原罪の神人(g)による救世物語も無記・無意味となる。かくして c.n. においては、仮称原罪への可能性は、前記 imm. と同様、三神とその神性全存在への第二の他性として外在し、故に c.n. は成り立ち得ず、そして D₂の c.n. と P.O.S. は、基底から D.p.c. が神変加持する、と認めるのである。

尚表題の後半の適用で扱うのは(ア)IAHR 2005 の『要旨集』での高名な奥村一郎神父の公言(「仏道をならふ」についての道元の「自己を忘る、」よりも、イエスの「自分を捨てて私に従え」の方が「更に鋭い」)。(イ)滝沢神学の所説(世界と人間の自己が「第一義(に)接触」し其者と「不可逆不可同不可分」なのは三一神だ)。(ウ)エックハルトの「信仰」の言明(三一の「父」の最重要性質は「第一の原因」たることだ)。いず

れも念頭に D.p.c. が皆無で、自然理性上、誤りであろう訳を説述する。

現代思想の宗教回帰

——スラヴォイ・ジジエクの議論を中心として——

加藤 喜之

ジョン・カプートが唱えるように、宗教回帰が宗教者や神学者ではなく、哲学者や批評家によって唱えられているのが、現代の様相である。しかし、これは、単純に、プレモダン・反啓蒙的な宗教に回帰するというのではない。ジョルジョ・アガンベンやアラン・バディウと並んで、「ポストモダン」や「デイコンストラクシヨニズム」の超克を試みる思想的動きを牽引する、ラカン派ヘゲリアンであるスラヴォイ・ジジエクの著作には、宗教、特にキリスト教についての言及が多くみられる。絶え間なく繰り広げられる映画批評、文学批評、ジョーク、時事批評によって、明らかにされると同時にあいまいになるジジエクの思想を、キリスト教理解に軸において理解していくことが本発表の目的である。

カント以前の啓蒙的理性は、矛盾を超越する神／原理の存在を肯定する。カント自身はこの問い立てが、人間理性の根本的な不可能性と限界を表すものであり、問いはアポリアになるのみであると論じている。ジジエクは、カントのアポリアをラディカルに理解し、高次の調和原理を否定し、否定そして矛盾と